

儒学論集

儒学文化 第4号

巻頭言

儒学を考える 「経世護人而教育之」

学校法人昌平黌 理事長

儒学文化研究所 所長

田久孝翁

世を経（おこ）し人を護ることは是れ即ち教育の基本であります。本学が進めている「平和経済学」の精神もまたそこにあるのであって、子曰く「経世済民」世を経し民を済（すく）え、と言う孔子の言葉は、今を去る 2500 数十年前中国における春秋戦国時代の為政者に対し、政治経済の在るべき姿を論しているのであります。

それから世は既に 2550 数年、光陰矢の如く過ぎ去り、正に近代文明が謳歌する世相の中で人々は何不自由なく、我が世の春を迎えているやに思われるのが近代文明下の社会的世相ではないでしょうか。

そこで文明とは何か、我々近代人は是を冷静に判断する時代的背景を迎えていることを理解しなければなりません。万物の霊長人間の社会は正に「性悪説」荀子に軍配が上がる不道德極まる行為によって積み上げられているのが現代的文明社会の実体であると云わざるをえません。このままでは日本を始め世界の未来は何処に行くのか案じられてならないのが現代文明の問題であります。

そこで考えたのが「経世護人」即ち「世を経し人を護る而して之教育」であります。そこには孟子曰くの「性善説」があります。孟子は全ての人は生まれながらにして「善」であり、悪は後天的に生じるものであり、これを善道するものが全て「教育」であり、子曰くの「有教無類」の精神であります。生まれたままの人間は誰でも平等であって、教育が全てであると云っているのであります。斯くして人を護ることは己を護ることであり、それが出来なければ世人を世界を護り治めることは出来ません。

話を元に戻しますが、現代形文明社会の在り方では果たして人を、世界を護ることは出来るのでしょうか。全世界 60 億の人々は現在の文明病に冒されているのではないのでしょうか。そこに報復と云う言葉が生まれてくるのです。報復には報復と云う性悪説が生まれて参ります。

そこには片鱗程も万物の霊長たる人間の存在感は生まれてきません。動物的本能の赴くままに文明の破調に乗って武力を行使することは果たして文化人と云えるのでしょうか。

当然のことながら、ここでもう一度人類は性悪説なのか、性善説なのか、併せて文明開

花の時世は既に後天的異物であったのかを極めることは、現代人に与えられた共通の使命感ではないでしょうか。当然のことながら儒学思想に基づく平和経済学探究の余地が生まれてくると云うものであります。

文化や文明は必ずしも殺人行為に利用してはなりません。全てが無用の長物と化しているのが、敢えて申し上げるならば文明的遺産として上げられる「核」の問題であります。日本は世界唯一の「被爆国」として少なくともこれ等如何なる挑発にも乗ってはなりません。

「和を以て貴しとなす」ことは「義」の根幹であり、義の伴わない如何なる高邁なる理想と云えどもその目的を達することは出来ないと諭しているのであります。